令和６年度　第２回京都市国際交流・多文化共生審議会　摘録

日　　時：２０２５（令和７）年２月１４日（金）午前９時３０分～午前１１時３０分
場　　所：京都市国際交流会館　１階　第１及び第２会議室
議　　題：（１）京都市国際都市ビジョンの推進及びビジョンを踏まえた本市関連事業について
（２）今期提言について
出 席 者：＜京都市国際交流・多文化共生審議会委員＞
大熊晋委員、佐野真由子委員、孫美幸委員、チースレロヴァー・クリスティーナ委員、
浜田麻里委員（座長）、林建志委員、前田哲央委員、村上義委員、
リュウ・ウィトン委員
＜京都市＞
松野　総合企画局政策推進担当局長、西松　国際交流・共生推進室長、
長谷川　同副室長、大久保　共生推進担当課長、楢山　企画調査係長、
大野　共生推進係長、城戸　係員
次　　第：（１）開会
（２）議題
（３）閉会
配付資料：資料１　令和６年度の主な国際交流・多文化共生関連事業について（議題１）
資料２　「京都市国際都市ビジョン」モニタリング指標の状況について（議題１）
資料３　今期提言（案）（議題２）

１　議題１

＜浜田座長＞

それでは、事務局から国際都市ビジョンの推進に係る関連事業等の説明をお願いする。

＜事務局＞

（資料１及び資料２に基づき説明）

＜浜田座長＞

ありがとうございました。それでは、ビジョンの推進に関する今年度の取組状況、それからモニタリング指標の状況に関して御意見、御質問を頂戴したいと思う。

＜村上委員＞

モニタリング指標の状況で、ビジョンをつくったときの黒枠の数値に比べて、今回はほとんどの数値が下がっているように見受けられる。市民の意識が下がっているように見えるが、それが正しいのか、もしくはそうであるとすると、それはどういった要因によるものか。

＜事務局＞

市民生活実感調査については、指標の中に設けているところは、ビジョンをつくったときから全ての数値が下がっている。この調査は途中で設問や調査方法が変わっており、黒枠の部分につ

いては、旧設問に対する数値となっていることから、単純に比較ができない部分もあるが、数値は増えていない状況にあると考えている。

＜村上委員＞

黒枠はコロナ前のデータだと思うが、それと比べてコロナ後の今回は、ほかのデータでも外国人の割合は増えているが、市民の方の意識は下がってしまっているように見える。それに対してどのように考えておられるか。これまでこれだけ色々と施策を打ってきたのが有効に効いていないということになるのではないか。

＜事務局＞

後ほど御説明させていただくが、来年度、外国籍市民や日本人の市民を対象にした実態調査を実施するので、そこで一定の結果を得られると考えている。また、恐らくインバウンドの方が増えたり、急に技能実習の方などが増えて地域でトラブルになるという話がここ２年ほどで増えているので、そのような地域では、言い方が良いか分からないが、市民の方の外国籍の方に対する好感度のようなものが下がってしまっているのが少し影響しているのではと想像している。

また、新設問は新しいビジョンに基づいて作られており、以前よりもハードルが上がっているものもある。例えば、国際都市像の３、旧設問であれば「国際交流が盛んである」というところだったが、新設問では、「市民、民間主体の国際交流が行われ、様々な世代で外国文化への関心や理解が高まっている」ということで、より高いものが求められたことから、一旦数値が下がったものと理解している。そのうえでこの下がったものをこれから確実に上げなければならないと考え、施策に取り組んでいるところである。

＜村上委員＞

オーバーツーリズムの影響ということか。

＜事務局＞

まず、１つは調査の設問を一部変更したことによって、若干分かりにくくなっているということもありまして、先ほど説明した来年度の予算で外国籍市民の実態調査、外国人だけではなく、日本人の方にも調査をすることになって、そういったことも少し聞いていきたいと思います。オーバーツーリズムの問題は、私自身もまちなかの飲食店やバスの混雑を感じており、影響があるのではと思う。その辺りは調査で聞いていきたいと考えている。

＜村上委員＞

はい、分かりました。ありがとうございます。

＜浜田座長＞

ありがとうございました。とても大切な御指摘だと思う。

恐らく一般の方は、観光客か、住民の方なのかという区別がついていないところもあると思うが、逆に言うと、地元におられる方々とやはり顔の見える関係、プラー委員のおっしゃる友人関

係ができていないということも少し影響していると思うので、色々調査の中で確認いただき、その辺りの課題が浮かび上がってくればよいと考えている。

では、佐野委員、お願いいたします。

＜佐野委員＞

ありがとうございます。

基本的な質問で恐縮だが、このモニタリング指標は、誰がどのように決めているものか。何を定点観測の項目として取り上げるということを、誰がいつどのように判断して決まったのかということをお聞きしたい。

＜事務局＞

こちらは国際都市ビジョンをつくったときに、それぞれ４つの都市像を目指すということを決めて、その進捗を図るための指標を設けるということで、そのときに設定したものである。

＜佐野委員＞

では、次にビジョンが変わるときに変わるということか。

＜事務局＞

その可能性はある。

＜佐野委員＞

そのお話を伺う前にこれらの項目を眺めて感じていたのだが、項目の取り上げ方自体が、京都市が何を国際化であると考えているのかという端的な表現になり、どの数値が上がってくれば国際化したと言えるのかという認識の在り方を示すものだと思う。人の感情はそもそもはかることが難しいが、これ自体をもう一歩、二歩工夫できないだろうかと感じた。

グラフで抽出していただいたものは特に重要だという意味合いかと思うが、例えば、果たして住民基本台帳登録者数が上がればいいのか。外国籍市民の割合が増えれば確かに国際的なのかもしれないが、それがここで議論しているような意味での豊かなまちなのか。例えば京都市役所の窓口で、これだけ市役所や区役所でサポートできるように施策を打ってくださって、すばらしい工夫だと思っている。では、この中で本当にそれを利用して、更にそれが生活に役立って良かったと思う人がどのぐらいいたのかということを知りたい。本当に困ったときに助けてもらえるまちだというふうに感じたのかどうかなど、外国人の割合がどれほど増えたかというのとは違うレベルの指標を上げたい。

一方、今御指摘のあった「文化の多様さを感じられるまちとなっている」と感じている人が減っているなどという辺りは、それなりの方法で聞いていらっしゃると思うが、感情の問題なのではかるのもなかなか難しいだろう。これらの間で、何かもう少し明確化できて、かつ本当の意味で、京都市はこういうことが増えれば市民の生活が豊かになったと捉えているのだな、なるほど優れた指標だなと思われるような項目の上げ方を次期、工夫できたら良いのではないかと思った。

＜林委員＞

私は、この指標づくりなどの取組を市民参加としてずっと担当していたので、反省の弁も含めてお話ししたい。

指標については、当時から数値目標があると目標が明確にしやすくて良いということで導入したが、非常に設定が難しい。アウトカム指標もあれば、それにつながるアウトプット指標もあり、常にトライ・アンド・エラーしているが、これについてはビジョンを作るときに、この審議会のような委員会で原案を基に意見を出し合ってきたという経過がある。

少しこれが当たり前になってきて、忘れていらっしゃる雰囲気があるが、学校の通信簿のように数値が悪いとだめで、なぜ数値が悪いのかといじめるのではなく、この結果はあくまでもコミュニケーションツールであって、結果から、どうしたら良くなるのか、という議論するためのもので、完全な指標はあり得ない。

だから、どうも事務局はそういうものを見せると、これは減っているから指摘されるなど、縮み志向になって、やはりいい数字になる指標に変えようなどとなってしまうので、評価する側もそういうものだというように見ながら、これは本来増えなければならない指標なのか、あるいはもうキャパがオーバーするので維持した方が良い指標であるとか、逆に減ったほうが良い指標とか、色々なことを考えながら、まさに言いたいのはコミュニケーションツールなので、これで一喜一憂する必要はないのではないかということである。

＜事務局＞

私は過去に観光客に関する様々な調査を担当したことがあり、以前は観光客の数を年間５，０００万人に増やそうと取組を実施してきたが、今はそうではなく、観光の質を高めることを目指し、実際に調査員が街頭に出て、観光客を対象に、京都の観光はどうか満足度を調査する幾つかの指標で聞いていくということを行っている。それをもって京都観光の質はどうだったか、満足度が高かった、質が上がったなどという基準となる指標をつくったことがある。

ＢＩＡの調査をするときには、先ほど申し上げたように、外国人の方が京都で生活しているその満足度や、どう感じているかを一度調査して、また２０年後などではなく、もう少し区切って例えば５年ごとに調査し、満足度や交流の変化がどうか、良くなっているか悪くなっているかということを定期的に聞かなければ、なかなか把握はしづらいというのが正直なところである。我々が今持っているデータや数字では、これが限界で、確かにこれで把握できるのかという疑問もあったので、その辺りは来年度に向けて工夫していきたいと思うし、またそのときには、各委員の皆様に御意見をいただければありがたいと思っている。

＜浜田座長＞

ありがとうございます。そのほか、いかがか。

＜チースレロヴァー委員＞

同じような話で、国際都市像１の設問が変わり、「受入環境がある」というキーワードがなくなったということだが、ここは重要なポイントではないかと思う。「引き寄せる魅力がある」だ

けではなく、やはり来た人を歓迎できるような状態であるかどうかというのが重要だと思う。
数値が増えたというのは非常に分かりやすくて、経済的効果なども分かりやすいと思うが、多くの人が来たところで、では、これからどうするかが一番の課題ではないかと思う。
　しかし、設問が変わってからこの指標に関しては２０％も下がっていると。どこでどのようにその差が出てきたのか、知りたいところである。

＜浜田座長＞
　ありがとうございます。指標の中でそのようなことがはかれていないということもあるので、施策の中で本当に引きつけるだけではなく、引きつけた後、どうするかというところにも是非力を入れていただきたいと伺った。
　孫委員、いかがか。

＜孫委員＞
　ありがとうございます。永住者数をずっとフォローいただいているが、外国籍の住民基本台帳登録者数ということで、特別永住者を含むとややこしくなるというのがあったと思う。
　しかし、特別永住者の人数は確実に減っていっているので、その前提に問題があるというところは指標自体には出さずとも、特別永住者が減っている背景に何があるのかというのは分かったうえで、これをフォローしていかなければならないと思う。何かの数字と一緒にするとややこしいからとなると、ここの審議会の趣旨とは違ってくると思った。おそらく、今、２０万から３０万人ほどになっていると思うので、特別永住者数自体は、日本全国で、京都でもかなり減っていると思うが、生きづらさや生きやすさを考えたときに、この減っていく意味というのは少し念頭に置いておく方がよいと思った。
　しかし、実態調査してくださるということで、随分頑張ってくださっているというのは伝わってきたので、ありがたいと思っている。

＜浜田座長＞
　大事な御意見、ありがとうございます。是非実態調査の中でもそういった面が明らかになるようにお願いできればと思う。
　議題１について様々御意見をいただきありがとうございました。皆さんの御意見の中で共通していることは、モニタリング指標というのは大切だが、数が増えた減ったということではなく、本当に外国籍市民の方との共生を推進していくための質的な部分をどのように捉えていくかが大事だということ、孫委員からは、特別永住者の背景についても、やはりしっかり課題意識として忘れずにいたいというような御指摘があった。
　それでは、議題１についてはここまでとさせていただく。事務局から令和７年度の事業について御報告があるとのことなので、御説明をお願いしたい。

＜事務局＞
　（参考資料に基づき説明）

＜浜田座長＞

ありがとうございます。この新規事業について、何か御質問、御意見はあるか。

色々な情報が得られ、基盤整備が進んでいくということを期待させていただきたい。

２　議題２

＜浜田座長＞

では、次の議題「今期提言について」に進ませていただく。

まず事務局から国際交流に係る提言案について、御説明をお願いする。

＜事務局＞

（資料３－１に基づき説明）

＜浜田座長＞

ありがとうございます。先ほどのプラー委員の御指摘にもあったが、特に若い人を中心に国際交流に対する関心が低くなっているという現状を踏まえて、こちらからそういった関心を高めていくように、様々な取組をしていただきたいというふうな趣旨かと思う。

それでは、ただいまの提言の案について、委員の皆様から御意見を伺いたいと思うが、いかがか。

資料３を参考につけていただいているが、これまでの審議会で委員の皆さんから出していただいた御意見を基に、この提言案を作っていただいたということで、特に仲間づくりや継続発展の支援という辺りがポイントになっていると思うが、いかがか。

仲間づくりなどで言うと、興味のある人を育てていくというような点について、大熊委員、いかがか。以前提案いただいていたと思うが、具体的な注意点などがあれば、一言いただければありがたい。

＜大熊委員＞

以前も発言させていただいたかもしれないが、「一緒に活動する仲間を増やしていこう」、「団体同士で交流をしよう」ということに関して、否定する人はいないと思う。しかし、実際に新しい人を入れる、あるいは他の団体と交流するという段階になると、それぞれのポリシーやスタンスの違いなどでギクシャクするかもしれない。新しく仲間を迎えようとする団体と、新たに活動を始める個人がマッチングした後、自分たちで進めてもらうだけではなくて、伴走する存在がいれば良いと思った。

あと、他団体の活動について、「〇〇をしている」という外形的な部分は目にするが、「どんな思いで活動しているのか」という内面的なところも分かち合える場面を作り、団体同士でそれぞれの思いのすり合わせができるとよいだろう。結果、「それぞれで活動するのがよさそうですね」になるかもしれないが、思いが近い者どうしで「今度、何か一緒にやりましょう」といった協働につながるかもしれない。活動内容の一覧表を作るのも必要かもしれないが、活動している者どうしが思いを語れる場のようなものが、定期的にあると良いのではと思った。

また、今の文脈とは少し違う部分で、２つある。

「若い世代を」とあるが、どの辺りをイメージしているのか。私の仕事の分野からすると、「若い世代」は１０代から２０代くらいの青少年かと思うが、地域コミュニティに出ていくと１０代、２０代の姿はほとんど見られない。むしろ４０代、５０代ぐらいが若手と呼ばれ、６０代でもフレッシュな場合もある。場面によって「若い」とされる年代は異なるので、「若い世代を」というのは、読む人によってイメージするところが違うだろう。読み手が共通のイメージを持てる具体的な表現がよいのではないかと思った。

先ほど話があったように、国際や多文化というキーワードで抜き出すと色々な活動がある。福祉的な生活サービスを提供するところもあれば、インターナショナルスクールのような取組や、もっと遊びベースなところ、あるいはスポーツを通した交流をされているところもあると思う。それぞれの活動を通して、近しい分野の団体と横のつながりができていると思うが、「国際」とか「多文化」といった切り口で横串を刺してつながるには、どうしたらいいだろう…を考えていた。提言の議論から離れるかもしれないが、他分野交流という視点を考えた際に、行政の職員さんは実はそれが得意なんじゃないかと思った。人事異動という仕組みで、さまざまな分野に人が動く。その人たちを介して、異なる分野どうしをつなげたりできるのではないかと思う。私は青少年育成の分野で長らく仕事をしているが、実はこれ以外の分野で仕事をしたことがほとんどなく、他の分野の方をあまり知らない。ある意味、特定の畑に特化して、道を深めていく…とも言えるが、なかなか違う畑の人たちとは知り合う機会も少ない。行政は人事異動という仕組みの中で、分野を飛び越えて人が動くので、「他分野をつなげる」のが強いのではないか。産業界、文化芸術界、福祉業界などをつなげられるキーパーソンとして、実は行政マンが果たせる役割が大きいのではないかと思う。

＜浜田座長＞

ありがとうございます。若い世代というと皆、学生などを思い浮かべるが、そうではなく地域での相対的な若い世代のようなところもターゲット層に含めて考えたほうがいいという御提言と理解してよいか。

＜大熊委員＞

「若い世代」という言葉を見て、読み手がどの世代をイメージするのか。あまりずれないように具体的にした方がいいのでは。

＜浜田座長＞

皆何となく学生をイメージされたのではと思うが。

＜事務局＞

事務局の案としては、大学生もしくはもっと早い段階で、小中高の頃から国際交流の機会があると、それが大人になってもいかされるのではないかということを念頭に、かなり若い世代から大学生くらいまでをイメージしていた。また、「はじめとする」ということで、もちろんより幅広い層も含めている。

＜浜田座長＞
趣旨は皆さん共有できたかと思う。ありがとうございます。
そのほかいかがか。

＜村上委員＞
ジェトロでスタートアップビザの支援をやっている関係で留学生の方に接する機会が多いので、その観点から２つコメントさせていただきたい。
この提言の中で、仲間づくりとおっしゃったところは非常に大事な観点で、留学生らからも、コミュニティが大事で、そういう活動を継続的にやってほしいとよく言っている。１回、２回ではなくて何回も実施することで輪が広がっていくので、そのコミュニティづくりを是非お願いしたいという話があり、私も本当にそう思っている。
あともう１点は、さっきの話につながるが、市民への共感というところが大事で、スタートアップは基本的に社会課題の解決、社会を良くするための活動を実施しているが、それが伝わっていない可能性があり、この自分たちの活動によって社会が豊かになっているというのをもう少し皆さんに実感してもらえるような働きかけが本当はあってもよいのではないかと思った。非常に良いことをやっているはずなのに、そこの理解が得られないので、彼らにとってはそれがうまくビジネスにつながらないということなので、うまくもう一押し何かがあれば、情報発信なのか、先ほどの留学生をもう少し活用してうまく市民の方に理解いただくといったことが必要だと思った。

＜浜田座長＞
ありがとうございます。同じ立場で仲間というだけではなくて、サポーターというか、社会全体が支えるような面も重要だということと理解してよいか。

＜村上委員＞
はい。何か自分が困っていることに共感してもらえる、そういう第三者がいると、孤独感が癒されるというか、彼ら留学生は外国人なので基本的には家族と離れて過ごしているということで、そういう仲間がいるだけで随分と違うと思う。

＜浜田座長＞
ありがとうございます。そのほかいかがか。

＜チースレロヴァー委員＞
少し補足だが、留学生は滞在期間が基本的に非常に短く、孤独を感じることもある。私も留学の経験があるが、いかに地域参画をできるように体制をサポートするのかということが非常に大事な話だと思う。
うちのお寺でも、留学生のボランティアが何人か来てくれて、非常に楽しい。私たちも非常に助かるし、お庭掃除などをしていただき、留学生としても地元のそういうところで色々活動でき

る、ほかの外国の人と交流ができるというのは非常に良いことではないかと思う。これから留学生も増えていくと思うので、非常に大事なことである。

＜浜田座長＞

ありがとうございます。ケアサポーターというか、先輩のようなメンター的な存在として同じ立場の人たちがいてくれると非常に良いと。ありがとうございます。

リュウ委員も手挙げておられましたか。お願いいたします。

＜リュウ委員＞

私は今中国の留学生会のメンバーである。私たちは時々、国際交流の活動があるが、例えば京都市の市民が一緒に参加する場合、皆さんがこの情報を知ることが難しいと思う。そして、若い人をターゲットとする場合は、インターネットやＳＮＳ、アプリなどが、情報を知るツールとして安い経費で活用できると思う。

例えば専用のアプリ、京都市にはたくさんの国際交流団体があるので、皆がこのようなアプリでメッセージを書く。例えば、「２月１２日にｋｏｋｏｋａでベトナムの活動がありますので、希望があれば御参加ください」のようなメッセージを広報すれば、簡単に情報を知ることができると考える。

＜浜田座長＞

ありがとうございます。ネットを活用して広報するというのはよく出るが、アプリを作れば良いのではないかというのは非常におもしろいアイデアだと思う。

それともう一つ、留学生会の存在というのも非常に良い御提案だと思った。国際交流をするときに留学生会の人と連携するような形で何か色々なプロジェクトができるのではないかというアイデアをいただいた。ありがとうございます。

そのほかいかがか。

＜前田委員＞

質問だが、仲間づくりに関して非常に興味がある。現実的に令和７年度中にそういった場づくり、民間団体の国際交流団体の場づくりをされるという認識で間違いないか。

こういうことをしていきたいというお気持ちは非常に伝わってくるが、具体的にどのような形でいつまでに実施されるというのが分かるとありがたい。参加してみたいと思っている。

今、芸術国際交流の仕事をしているが、他団体との交流があまりない。弘道館などに時々行かせていただいたり、大きなイベントに顔を出したりということはあるが、全く知らない団体との交流というのはやはり少ないので、もっと知りたいという気持ちが非常に強い。そういう機会があれば大変うれしいので、もしそういうことが具体的にあれば教えていただきたい。

＜事務局＞

ありがとうございます。今の時点で、例えば何月にやるというものではないが、仲間づくりを

できるようにということで、今もｋｏｋｏｋａのホームページには様々な国際交流団体、活動されている団体の一覧表のようなものは載っており、連絡先は分かるというものだが、先ほど大熊委員からも御意見いただいたように、その情報だけを見て連絡先が分かるのと実際に交流する場があり、活動されている団体の思いが分かるのとは全然違うというのは、そのとおりだと思っている。情報を得られる場がまず有効に活用されるようなものになっているかを考えなければならず、そこから一歩進んで連絡先、活動情報が目で分かるだけでなく、実際に交流できるような場づくりについて検討する必要があると考えている。

国際交流という分野に縛られずに考えると、各区役所等でも様々なまちづくり団体と交流を持たれており、区単位では割と分野を横断的に集まる機会があるが、そういう場も広げていけるように区役所等とも連携できればと思っている。

＜前田委員＞

具体的にお話しすると、皆さん御存じかと思うが、京都信用金庫がＷＡＯＪＥという団体を支援されており、数箇月に１回などの頻度で活動されているそうである。私も何回か参加させていただいているが、外に向いている方々と交流するのは非常に勉強になり、そこで何かしらのコミュニケーションができてプロジェクトが立ち上がるということもあるので、そのような文化や教育分野など様々な分野をまたぐ形でつながりができる機会があるといいなと思う。京都市がそういう機会を設けていただけたら良いと考えているので、今後の参考になった。ありがたいです。

＜浜田座長＞

団体名をもう一度教えていただけるか。

＜前田委員＞

ＷＡＯＪＥと言い、世界団体のようだが、基本的には日本人で、海外とのビジネスをされている方が参加されている団体である。フランスなどヨーロッパはあまりないらしいが、アジアを中心として様々なところに散らばっているビジネスマンネットワークのような形であるようで、参加して楽しいと感じている。

＜浜田座長＞

ありがとうございます。勉強になりました。

事業をどのようなペースで進めていくかというところでは、恐らく今回、皆様に提言をまとめていただいたものを市長にお渡しし、市として取組を考えていただき、それを来年度予算を作るときに考えていただき、令和８年度に事業化、何かをしていく、そのようなペースだと理解してよろしいか。もちろん、すぐできることはすぐにしていただくと。

＜事務局＞

はい。先ほど大熊委員からも、マッチング、つなぐ役割というのは非常に重要だと御指摘をいただいた。ちょうど市役所でも来年度の４月からの組織改正の予定があり、市民参加の部分を今、総合企画局が担当しているが、区役所などを担当している文化市民局に市民参加の部門を変え、

各区役所が今まで自治会、体育振興会、女性会などを中心に取り組んでいたところ、それに加えＮＰＯなどの支援団体にも目を向けるとか、あるいは自治会とそういったＮＰＯをつないでいくとか、そういうことをもっとやっていこうという取組で、つなぎ手となる職員を育成していこうと。京都市の職員がつなぐ機能をもっと高め、区役所から外に出て行って、そういう団体同士をつないでいくとか、こういう機能を高めるというのは松井市長の下で決まっており、一部公表されている。

そういったことがまさにおっしゃっていたことにつながっていくので、そこで外国人の方というのはあまり想定していない可能性はあるが、それを我々の方から、日本人だけではなく、外国の方や留学生のそういうところに一緒に入っていってもらえるように働きかけをしてほしいということを、区役所などに伝えていくということが大事だと思う。特に学生と地域を掛け合わせることが非常に良いのではないかと言われているので、留学生も含めて、そういうことに取り組めば良いのではないかということを我々の方から伝えていけば良いのではないかと思う。

一部の区役所しかできなかった取組を全ての区役所で取り組もうというのが今回の組織改正の趣旨なので、ちょうど良い御意見をいただいたと感じた。

＜浜田座長＞

大変心強い御回答をいただきありがとうございます。

そのほか、国際交流に係る提言について何かあるか。

＜佐野委員＞

今のお話にその答えが含まれていたと思うが、「色々なところをつないでいく、その中で外国人の方が対象かどうかはあまり考えていなかった可能性がある」というところがとても重要だと思っている。というのも、「国際交流」といつまでもカテゴリー化して、それ自体を目的にしているということは、まだそれが普通の状態になっていないということであり、私自身、国際交流を専門にしてきたが、それが達成されたときにはいらなくなるというような自己矛盾をはらんだ、自己否定的な目標概念だと思っている。

この提言１の文案は美しくまとめていただいており、直すのは難しいと思うので、あえて何か修正してくださいという意味ではないが、現状の提言から読み取れる印象は、やはり国際交流ということを何か１つの特別な活動と位置づけているということである。例えば、チースレロヴァー委員と友達として付き合っていたら、それをいちいち国際交流とは言わないだろう。それが目指す姿なのではないか。しかしここに書かれているのは、国際交流という取り出された活動の関心を高めたい、そこに参加する人を増やしたい、ということだ。皆がまだ普通のこととして外国の方と友達付き合いできる段階にないので、そのために必要なきっかけということかとは思うが、それ自体を維持すべき目標として取り組んでいくという考え方を少し乗り越えられないかと思う。

国際交流は楽しいことばかりではなく、その摩擦を知ることも国際交流だ。文化的背景の違うもの同士が一緒にやっていくことは難しいということを知るのも非常に重要なプラスの効果だと思う。そうした様々なことを含めて、京都は非常に国際交流の舞台が整っているところなので、もはや「国際交流しませんか？」というところに目標をとどめず、これをきっかけにそのレベルを越えていく、要は当たり前の多文化都市というか、さまざまな文化的背景を持つ人が皆が普通

にしていられる都市になっていくことが重要ではないか。その中でこそこういうことも必要で、そのために仲間づくりなど、今日ずっと話に出ていた工夫も位置づけられるということなのではないか。「国際交流」の活動自体が目的なのではなく、何かその先の目標が見えるような形になると、もう少し納得しやすいように感じている。

＜浜田座長＞

大事な御提言だと思う。是非提言内容や背景に、そういった最終目標が読み取れるようなものを入れていただければと思う。

この審議会が国際交流と多文化共生の両方を扱っているということの意味は、まさしくそこにあると思うので、是非御検討をお願いできればと私も思う。

では、提言１についてほかにはいかがか。孫委員、いかがか。

＜孫委員＞

ありがとうございます。今、ちょうど東京にいるのだが、若い世代というか、学生たちと取組をするときに、例えば学生があるＮＰＯの国際交流や外国人支援に関わるときに、ボランティアとして行くのか、そのＮＰＯのアルバイトとして行くのか、大学の単位取得の範囲としてのサービスラーニングという形で行くのか、やっていることは変わらないのに、学生はどれを選んだら良いのかというのが問題になったことがある。しかし、受入先のＮＰＯ側としては同じことである。だから、そこのマネージメント、調整が難しいと思ったので、その辺り若い世代に紹介するときにも、何かうまくパイプになれるようなことというのは必要なのではと思ったのがひとつ。

もう一つは、既存の仕組みの交流が既に難しいところに国際交流を加えても難しいだろうと最近強く感じており、例えば地域の学校の中で国際交流などの取組を進めたいという話があり、小学校などその前の段階ではどうなっていたかと尋ねると、あまり話さないから分からない、となれば、それは国際交流の問題というよりも既存の地域の情報交換がよくできてないという問題になるので、何かそこを包括的に見ることができるというのが大事ではないかと考えていた。

＜浜田座長＞

ありがとうございます。最初の方はなかなか難しいが、学生を取り込んでいくときに、様々な問題が出てくるので、そのグループについては注意をしていく必要があるという点に対しても全く同感である。

そして、既存の枠組みができていない、例えば地域の連携とかそういったものができていないときに、国際交流だけ持っていっても駄目だということなので、先ほど事務局もおっしゃったように、様々な交流を深めていく、地域での連携を強めていくという中にうまく国際も位置付けていくというか、むしろ本当は国際交流や多文化共生がそういうものの起爆剤になることができれば一番良いかと思うが、少し枠組みを広げて考えていくというところは御提案と一致するところがあるのではないかと思っている。

ありがとうございます。それでは、一旦ここで提言１についての議論を閉じさせていただき、先に進めたいと思うが、よろしいか。

それでは、提言２の資料３－２の御説明をお願いする。

＜事務局＞

（資料３－２に基づき説明）

＜浜田座長＞

ありがとうございました。では、委員の皆様から御意見はあるか。

先ほどの提言１とも重なる分が多いかと思うが、やはり具体的に地域の中で顔の見える関係、何々さんという関係を作っていくということで、特に外国籍市民の方自身が担い手として活躍をしていただけるようにするためにはどうすればよいかということ。﨑ミチアン先生から前回の審議会で御報告いただいたが、多文化コーディネーターといった人たちをいかに育成していくかということや、これまで以上に相談体制を強化していくということを提言として盛り込ませていただいている。

そして、これまでも何回もこの審議会で提言を出しているが、誤解や偏見を解消するために、やはりもっと外国籍市民の方を知っていただくことが大事ではないかということで、そのことについての具体的な取組や、その地域で自治会に参加してもらうといったことが１つの目標になっているが、その前提としてやはり参加しやすい地域のイベントに外国籍市民の方にも是非来ていただけるような環境整備をしようというようなことが提言の内容になっているが、いかがか。

＜林委員＞

毎回適当なことばかり言って後で反省しているが、本当にそれをしっかり受け止めていただき、まとめていただいてありがとうございます。

その反省の上に立って、１９９８年の外国籍市民懇話会からずっと提言を読ませていただいて、その時々ですばらしい提言をされていると思うが、今回の提言も含め、言い方を変えてほぼ同じ提言がなされてきたと思っている。それは決して悪いということではなく、それぞれ非常に重要な提言であり、かつそれがその時々の京都市の施策に反映されて改善されてきていると。

しかし、先ほど佐野先生もおっしゃっていたが、到達点が分かっていないので繰り返し提言してきたというのは重要だと思っている。

ただ、今回、特にこの提言が非常に重要だなと思っているのは、新たに松井市長が就任されて、今、ちょうど２５年にわたるビジョンを作られ、現在それに基づく１０年の基本計画が作られている最中だということで、そこに与える影響もかなりあるのではないかと思い、そういう意味で幾つかまた反省しながら提案させていただきたいと思う。

１つは、この背景でも少し触れられているが、前書きや結びでもよいかもしれないが、急激に外国籍市民の方が増えているということをやはり書くべきではないか。先ほど孫委員もおっしゃっていたが、逆に特別永住者の方は減ってきており、逆に外国籍市民の比率は増えてきている、国籍も増えてきていると。統計を調べてみると、京都市の外国籍市民の方の数は平成時代では４万１，０００から４万３，０００ぐらいで停滞している。また、特別永住者の方が半数以上だったのではないかと思うが、ちょうど浜田先生が座長になられた頃から急激に増えてきていて、先ほども御説明があったが、５万を超えたと言ったらすぐに６万になっている。国籍も１２０ほどだったのが今、１５７箇国、地域。この急激な変化というのはやはり地域に強いインパクトを与

えているということをもう少し危機感を持って伝える必要がある。しかし外国籍の方が増えることは本当は良いことである。もっとたくさんの方に来ていただくことで、よく市長がおっしゃるように新しい文化が生まれる、新しい価値観が生まれるということは非常に良いことだが、ネガティブな部分もたくさん出てくる、コンフリクトも起こる、逆にチャンスとして新しい方々に地域の担い手になっていただく、ポジティブな捉え方、この辺りを伝えていってはどうかというのが１つである。

２つ目として、心の壁も非常に重要なことだと思うが、これまで語られていた言葉の壁、一番初めに入る言葉の壁が語られていないと思っている。具体的な提言内容の「外国籍市民等の地域参加の担い手育成」、この中で、例えば、１つ目の丸のところの「活動の場や機会の拡大」の前に、「多様な形で日本語学習をできる場や機会を創出、あるいは充実させる」ということを書いていただいたらどうかと思っている。「背景」の記載の部分で我が意を得たりで、家族滞在者について記載いただいているが、今、３，５００人ぐらい家族滞在者がおられる。以前の提言にも書いてあったが、自分の意志で来日された方は言語を勉強されるが、意図せずにパートナーなどに連れられてきた方は、日本語も分からないのに学習機会も少ない。以前日本語教室で話を伺ったが、お子さんがプリントを持って帰ってきても読めず、だんだん家から出ない状況になってきたと。その辺りの手が差し伸べられていないところに対してどれだけ手を差し伸べるか。しかし、大仰に日本語教室と言っても難しいので、少しその辺りで多様な形でライト感覚で、日常会話でよいので、学ぶ場、覚える場というのを作るようにというのを書いたらどうかというのが２点目。

そして３点目が、２番目の黒四角の大きな項目、「外国籍市民等に対する理解及び交流参加の促進」についてである。これも重要だが、地域の住民の方と外国籍市民が、市長はよく交じり合うという言葉を使われるが、交じり合う場を、地蔵盆や夏祭り、既存のものだけではなくもっと新しいライトなものを多く作る。先ほど事務局が、区役所が更に打って出るという話をされたが、初めの初動期は区役所や学校に引っ張っていただいて、そういう場を作っていだたく、交ざり合う場というのをここに書いていただければ非常にうれしいと思っている。

とりわけ、私たちは平成２０年過ぎぐらいに新しい公共という言葉に心踊りながら市民参加を進めてきた。また市長が新しい公共というふうに言われているが、やはり新しい公共の中には、我々はもう外国籍市民というのが看過できないと言ったら失礼だが、昔は少なかったが、今、４．４６％になり、すぐに１割になると思う。新しい公共の担い手としても外国籍市民の方に、これも市長がよくおっしゃるが、出番や居場所を作る、これにどのように取り組めばよいのか、これをきっちり言っていく必要があると思っている。

＜浜田座長＞

ありがとうございます。新しい公共の中に外国籍市民や外国にルーツを持つ市民の居場所と出番を、というのは非常に大事な御提言をいただいたと思う。言葉の壁ということについては、先日ｋｏｋｏｋａで、地域における日本語教育推進事業総合調整会議があったが、その中で、ほとんど自治体では、国際交流協会ではなくて行政の方が日本語教育の施策をきちんと方針を決めて実施をしていっているという中で、京都市はそこが課題になってくるのではないかという発言もあった。これも非常に大事な問題であるので、是非御検討いただければと思う。この提言の中に入れ込むのには工夫が必要かもしれないが、是非視点として入れていただければと思う。

そのほかいかがか。

＜チースレロヴァー委員＞

情報を届けるというのは非常に大事なことだと思う。もちろん、国際交流に何となく興味があり活動に参加したい方は、例えば自分で調べてこういう行事があるから行ってみようとなると思うが、そういう方と別に本当に普通に暮らしている、国際交流に興味のない、いわゆる一般市民に今、外国人の住民がこれだけ増加しており、オーバーツーリズムとは別の話でこういう問題もあるのだと考えるきっかけを作るのが非常に大事ではないかと思う。

例えば、提言案に市民しんぶん、ＳＮＳなど書かれているが、それこそバスや地下鉄、色々京都市からも広報があると思うが、例えばDV相談ラインなどを地下鉄に乗っていると目にすると思うが、そこに、外国人住民の問題を取り上げているような広報をされると良いのではないかと思う。市民しんぶんはなかなか忙しくて読まない、ＳＮＳは自分であえて見なければ情報が届かないのが現状かと思うが、多くの人がバスや地下鉄を利用するので、そこで目に入れば、「外国人は実は京都にたくさん住んでいて、色々な問題を抱えているのか」と、そういった知るきっかけ、考えるきっかけを作るのは、今の段階では非常に大事ではないかと思う。それこそ、佐野委員がおっしゃったように、国際化は何か特別なものではなく、当たり前に隣にそういう方がいるような環境を作るのが現段階では非常に大事だと思う。

もう一つ、全く違う話だが、今後出てくるだろう問題として、歯科医の友人に聞いたのだが、友人は老人ホームの患者さんを診ることがあるが、老人ホームに外国人が入居されており、認知症で日本語を忘れて母国語しかできなくなる患者さんがいらっしゃるようで、現段階ではレアなケースかもしれないが、今後、そういう課題も出てくると思う。最近耳にして驚いたが、これからそういったことも頭の隅に置いた方がよいのではないかと思っている。

＜浜田座長＞

ありがとうございます。広報と、私たちが思っている以上にこんなところに国際化・多文化共生の課題というのが広がってきているということを、改めて考えさせられる事例を御紹介くださった。

そのほかいかがか。孫委員、いかがか。

＜孫委員＞

ありがとうございます。地域の夏祭りや地蔵盆、国際交流のイベントも含めて、どこかでヘイトの対象の団体などが攻撃されるのではないかという怖さはいつもあり、京都なら東九条のマダンはすごく気を遣われたと思う。自分たちも攻撃対象になるのではないかと思いながら、ヒヤヒヤして実施されていると思う。

関東ではクルドの方の訴訟にまで、進展してしまっているが、本当にひどい状態があるので、そういったことには断固として反対するというのは分かるように書いていただければと思う。安心・安全のところだと思うが、地域でイベントを開催する際にも安心して開催できるように、そういうヘイトの対象が来ないような措置というのは行政としても前にあったと思うが、準備がある、安心感のようなものが盛り込まれればよいなと個人的に思った。

そして、先ほどチースレロヴァー委員がおっしゃったことも毎回そういう話があったと思う。しかし、日本の年齢を重ねていく良いモデルがあまりないと言ってはなんだが、「素敵なおじいちゃん、おばあちゃん」のモデルがあまりないと私はずっと思っており、知り合いの御高齢の日本の方にマンションで独り暮らしされている方がいるが、色々な方から老人ホームに入れと言われるという。だから、おじいちゃん、おばあちゃんになって地域で安心して生活できるというのが健康であるということでしか保証されないというか、何かその辺りの社会福祉が非常に難しく、加えて外国籍であれば、そこになおさら言葉の問題や認知症で忘れていくといったことが更に乗っかっていくので、その辺りどうやって助け合ったら良いかというのは今後の課題だと思っている。

＜浜田座長＞

ありがとうございます。安心・安全という点だが、広報は非常に大事だが、広報すればするほどそういった危険も高まってくるということで、是非その点、確認できるような体制があればと思う。また、そもそも高齢者が幸せに暮らしているモデルというのが非常に希薄であると。これはもっともだと思う。日本人であってもというと変だが、社会全体として地域がどう豊かになっていくかということを考えていくのが非常に大事であり、外国人のこと、課題を考えることで、むしろそういった課題も明らかになってきている現状だと思うので、非常に大事な視点をいただいたと思う。ありがとうございます。

提言の１と２、国際交流と多文化共生について多くの御意見をいただいた。

なかなかまとめきれないが、１つは仲間づくりが非常に重要であるということ、そしてそれも一度限りではなく継続してコミュニティができるようにし、そのコミュニティを作っていくのに行政がむしろ積極的に役割を果たしていくことができ、その必要があるという御意見があった。また、若者たちを取り込んでいくということで、ネットの活用や留学生会に呼び掛けるというようなことも御提案いただいた。

そして、多文化共生については、まず外国人の方が増えている、それもなぜ増えているのか、観光に来て良かったからなどということではなく、私たち日本社会の在り方として今、社会の構造が変わっているということも含めて、理解が進んでいないという現状の中で、そのことを市民の方に知っていただくということが大事だという御提言があった。そのための具体的な方法についても、広報の方法を含めて、それと広報が進むと反対に気をつけなければいけないということについても色々御提言をいただいたと思う。外国籍市民のことだけでなく、私たちの社会の在り方そのものを考え直さなければならないという非常に重要な御意見をたくさんいただき、ありがとうございます。

それでは、ここまでの議論を事務局の方で取りまとめていただき、提言案を修正いただき、改めてお示しいただくこととしたいと思うが、よろしいか。

＜事務局＞

ありがとうございます。事務局で本日の審議内容を踏まえて提言案を修正させていただく。その後、修正案をまず浜田座長に御確認いただき、その後、皆様にメールで送付し確認いただくという流れでよろしいか。

＜浜田座長＞
いかがか。

＜委員一同＞
異議なし。

＜浜田座長＞
はい。それでは、事務局で御対応をよろしくお願いする。
では、続いて提言書の市長への提出方法について、事務局から御説明をお願いする。

＜事務局＞
ありがとうございます。
提言書の提出については、前期と同様に、審議会として委員の皆様から直接市長に提出していただきたいと考えている。日程によっては委員の皆様全員に御都合をつけていただくのが難しいかもしれないが、できる限りたくさんの方に御出席をいただければと思っている。

＜浜田座長＞
ありがとうございます。それでは、提言書の市長への提出方法について、ただいま御説明いただいたような方法で進めさせていただいてよろしいか。

＜委員一同＞
異議なし。

＜浜田座長＞
はい、ありがとうございます。それでは、提言案の提出時期については、事務局において日程調整をしていただくということで、また後ほど改めて御連絡いただくようにお願いする。
それでは、議題の２については以上となる。皆様、本当にたくさんの御意見をいただきありがとうございました。進行を事務局にお戻しする。

３　閉会

＜事務局＞
皆様、本日は長時間にわたって御議論いただきありがとうございました。以上で、令和６年度第２回、今期第４回の京都市国際交流・多文化共生審議会を終了させていただく。
本日いただいた皆様の御意見については、庁内の国際交流・多文化共生推進会議や、国際交流・協力部会、多文化共生部会の構成部署に伝え、今後の取組、先ほどの区役所の話も含めて取組の参考にさせていただきたいと思っている。
また、提言については、今日御説明のとおり準備を進めさせていただく。
本日の議事録については、記名で公開することになるので、後ほど皆様に御確認をさせていた

だく。

この場をお借りして１点御紹介だが、松井市長が京都の様々な分野の市民の方と意見交換をして、それを広く御紹介し、また京都の魅力を発信するということを行っている。ＹｏｕＴｕｂｅ動画で発信しているものであるが、先日、京都で活躍している外国籍の方のＰＲ、発信ということでチースレロヴァー委員に御出演いただき、今ＹｏｕＴｕｂｅ動画の編集をしている段階なので、公表された際にはまた皆様にも御案内をさせていただきたい。

本日の会議をもって今期の審議会は最後となる。今後、市長への提言書の提出を経て、６月末に皆様の全員の任期が一旦終了ということになる。この間、初めて御参加いただいた委員も、前期から続けてお務めいただいている委員もいらっしゃるが、忙しい中、日程調整いただいて御参加いただいたことを改めて感謝申し上げるとともに、本日御紹介させていただいたが、来年度、外国籍市民、あるいは日本人の調査ができるということで、半歩前へ進むことのお力添えをいただいたと思い、大変感謝している。

来期の委員構成については、まず指名委員の皆様については、ある程度、委員の年数の関係や様々な市民の方に委員をお願いする観点から、一旦交代をお願いする、あるいはこの議論の継続性の観点から引き続きお願いする、といったことをこちらで考えさせていただき、事務局から個別に調整させていただきたく、御協力をよろしくお願いする。

そして、市民公募委員の皆様については、一旦任期終了となる。４月以降に来期委員の募集をさせていただく予定であるので、引き続き御就任に御関心、御検討いただけるようであれば、また御応募をお願いする。

以上で本日の会議を終了させていただく。本日は、お集まりいただき感謝を申し上げるとともに、この２年間、本当にお世話になりありがとうございました。

（了）